1476号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2025.1.20
〒690-0823島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

老い老いに

木幡智恵美

19

この年のニュースで一番衝撃を受けたのは、神戸の小学生殺人事件だった。犯行に及んだのは十四歳の未成年。思春期の子どもたちが抱える心の闇が重く心にのしかかった。長女が同じ歳で、その時期の子どもを抱える親として悩んでいた最中だったこともあったろう。事件の報道があった頃、日記にこうある。「帰りが遅いのであちこち電話する。学校にまでかけた。ちょうどその時、帰った。八時一〇分。昨日、首だけの遺体が置かれる事件があったばかりだ。心配しているのに、帰るとブツクサ言ってふてる。当分口をきくまい」。心配しつつ、相手の態度に本気で腹が立ち、どうしてよいかと右往左往する毎日だった。よく蝶の蛹に例えられる思春期の時期にある子どもへの対応については、後に中学校に勤めた際、そこが荒れていたこともあり、悩み続ける日々だった。暴言、暴力、喫煙、飲酒など、裡から湧き出す衝動を抑えきれず、様々な行動を起こしてしまうのは頭では理解できても、どう対応していいのか分からずじまい。どの行動も社会的に許されるものではないけれども、それが、命を奪う行為にまで至るのは尋常ではない。通常超えることはない壁を突破してしまう行為が現実に起きてしまった。衝撃的な事件だった。

十四歳だった娘が、「死にたい」とまで追い込まれることが、その数か月後に起きた。夕食時に台所に降りてこない。電話機の子機の使用が一時間以上続いている。子機の使用ランプが消えたのを機に二階に上がってドアを開けると部屋の中で泣いていた。数人の級友に囲まれてあれこれ言われたとのこと。クラスで起きているいじめについて話していたら、いじめている子たちの耳に入ったらしい。「四方を囲まれてあれこれ言われるのは死ぬほど辛かった」「いじめは悪いと思うけど、いじめている子たちも色々抱えているのが分かるし」「悪口を言った自分も嫌な人間だと思う」などなど泣きながら話した。どろどろとした思いを抱えて一番苦しんでいるのは本人なのだなと痛感した。翌日は学校を休ませた。家に帰ると、友だちが訪ねてきてくれていた。部屋を覗くと、二人の笑顔が見えた。

がらがら橋日記

宮森健次

松江歴史館　2

歴史館の利用の便宜を図る代わりに、というわけでもないだろうが、松江城にまつわる史実や伝説の資料を渡されて、子どもたちの語りに使ってもらいたい、と言われた。松江の歴史を伝承するのが館の存在理由だから、こども落語を使って、これまでとは違った活動ができないかと考えたようである。

出張落語会の依頼が間断なく入ってくるようになったが、なにゆえ呼ぼうと思ったか、ぼくは、それについてはどうでもいいと思っているので自分から聞くことはしない。でも、主催側から話されることがある。多いのは、集まりのよくない町内会や諸団体がこども落語があれば招き寄せることができるだろう、というものである。人寄せの難しさは、ぼくもそれなりに経験を積んできたから痛いほど知っている。だから、それを聞いても正直な思いを話されたと共感こそすれ、不快に思うことなどさらさらない。むしろ、だれもこどもの明るくて楽しそうにしているところ見たいのですよ、その需要をくみとられたってことです、としたり顔でほざきたい気持ちに駆られる。

歴史館も大手門から天守閣に上がり再び大手門を出て行く大多数の観光客を尻目に、風情に勝りながらも人々の動線からずれている悲哀をどうにかせんと考えた末の申し出だったかも、と想像する。だとすれば、それはとても目の付け所がよかったですね、と言いたいし、そう思われるようこちらの努力が今度は問われることになる。

松江城には代表的なところで三つの怪異譚が伝わっている。学校の怪談みたいなもので、お堅いところであるほどゴシップでバランスを取りたくなるのだろう。正史だけでは満足できないのが人間ってもんだろうから、松江城の魅力は出自の怪しげな伝承によって補強されるのだ。

ところが、何百年も語り伝えられ、資料にも繰り返し記され、その気になればすぐにでも目にすることのできるこれらの話をぼくは一つも知らなかった。もしかすると一度や二度は目にしたかも知れないが、どこにでもある話と、傲慢にもどこか小馬鹿にして捨て置いてしまった可能性もある。

こどもが語る、というお題を頭に置いて、この怪異譚と築城にまつわるエピソードを繰り返し読んだ。そのまま語ったのでは、資料を読むのと同じだから、子どもたちも語っていておもしろくないだろう。どうしたら語りたくなるか、これは自ずと答えが出ている。落語教室に依頼があったのだから、小咄、落語にアレンジするしかない。

30代フリーター　「チャットＧＰＴ」などの対話型生成ＡＩとやり取りしていると、人間を相手にしているような錯覚に囚われる。質問に対する応答はなめらかで、こちらが何を知りたかったかを逆に教えてくれているようにさえ思え、利用者に対する配慮やマナーを感じる。

年金生活者　実際はＡＩには配慮もマナーもない。それどころか言葉の意味さえ理解していない。ソシュールの用語を使うなら、シニフィエ（言葉の意味）とは無関係に、シニフィアン（言葉の音や形）だけをもとに文章をつくる。大量のデータから得た文章のパターンなどに基づいて、ひとつのシニフィアンの次に来るシニフィアンを確率論的に予測し、言葉をつないでいく。

その文章に「人間性」を感じるのは、それが何かを意味しているからではなく、意味を欠いたシニフィアンの連鎖が、読む側の心の位置と向きを決めるからだ。その作用を吉本隆明は自己表出と呼んだ。その「無意味」な作用が文学を創造する。谷川俊太郎は「意味を引きずる言葉を、どう無意味に近づけるか。それが詩の問題なのだと僕は思っている」と語っていた（２０２４年11月19日朝日新聞夕刊）。

ＡＩが詩や短歌や俳句を作ることができるのも、意味を存在しないものとして言葉をつないでいくからだ。ただし、できた作品を鑑賞できるのは人間だけであり、ＡＩにはできない。シニフィアンによって位置と向きを決定される心を持たないからだ。三木成夫によれば、心は内臓を土台にしている。ＡＩには身体がなく、したがって内臓もない。

30代　ＡＩが人間のような文章を書けるのは、人間の言葉にＡＩの仕組みと似たところがあるからではないか。

年金　ＡＩの文章のつくり方はダジャレに似たところがある。シニフィエ（意味）を無視し、シニフィアン（音と形）の共通性によって言葉と言葉を結びつけるのがダジャレだ。それは、ＡＩが言葉の意味とは関係なく、シニフィアンの共通性や差異によって言葉の連鎖を構成して文章をつくるのと構造としては同じだ。

これは私たちがふだんやっている連想に似ている。たとえば、猫を思い浮かべると、次は猫のことではなく、猫好きの知り合いを思い出し、その知り合いがうどん屋をやっていたりすると、飲食店を窮地に追い込んだコロナのことを思い浮かべる、といったぐあいだ。これはシニフィアンが言葉の意味（シニフィエ）とは無関係につながっていく性質と似ている。

ＡＩはその性質を利用して文章をつくる。ただし、アルゴリズムと呼ばれる一定の規則に従ってつくるので、できた文章は一般性、普遍性を帯び、「正解」に近いものになる。つまり人間のような「デタラメな」連想はできないだろうということだ。

30代　試してみたのか。

年金　「チャットＧＰＴ」にできるか尋ねてみた。すると「人間のような自由連想のプロセスを模倣してみますね」と言って、「猫」から始まって

「海」に行き着く次のような連想をしてみせた。

1. **猫**：可愛い動物で、柔らかい毛並みが気持ち良いですね。
2. **猫好きの知り合い**：そういえば、猫好きな友人がいました。彼はよく猫の写真をＳＮＳにアップしていました。
3. **ＳＮＳ**：最近、ＳＮＳで見た美しい風景写真が思い浮かびます。特に秋の紅葉が見事でした。
4. **紅葉**：紅葉を見に行くと、つい秋の味覚を楽しみたくなります。例えば、栗ご飯とか。

あとは省略するが、これが10まで続いている。文章は論理的に構成され、そのぶんデタラメさが薄いものになっている。「模倣」はデタラメになれないということだ。

30代　言葉についての常識をＡＩはくつがえしたとも言える。

年金　吉本隆明もジャック・ラカンも、言葉の本質を意味の伝達と考えることに異議を唱えた。意味を欠いた作用、吉本なら自己表出が、ラカンならシニフィアンが言葉の根幹をなすと考えた。意味を理解しないまま言葉をつないで文章をつくるＡＩはそれを実証した。

古典派経済学やマルクスは、商品の本質を使用価値にではなく、交換価値に見出した。商品はその使用価値とは無関係に交換の連鎖を形づくる。交換さえできれば使用価値は何でもかまわない。

そうした商品のとらえ方を吉本は自らの言語理論に応用した。指示表出は使用価値に、自己表出は交換価値に相当するものと考えた。指示表出は言葉の意味を伝え、自己表出は言葉を発する側と受け取る側の心の位置と向きを決定する。写真にたとえれば、前者は被写体であり、後者はアングルだ。写真を写真以外の何ものでもない存在たらしめているのはアングルであり、その意味で被写体は何でもかまわない。

ラカンは「シニフィアンはシニフィエと何の関係ももたない」（『アンコール』）と言った。それは商品の交換価値は使用価値と何の関係ももたないと言うのと同じだ。言葉の連鎖を形づくるのはシニフィアンであり、そのさいシニフィエは何でもかまわない。

ＡＩが言葉の意味を理解できないのに文章を書けるのは、吉本やラカンが明らかにした言葉の本質にしたがっているからだということに私たちは気づく。

ニュース日記　953

中村　礼治

ＡＩとの対話